

心を癒す歌声で知られる米国の歌手スーザン・オズボーンさんが、この三月十四日のパラリンピック閉会式で「上を向いて歩こう」を歌う。これを実現させたのは日本のファンをはじめ、多くの人の熱意があったからだ。とくに尽力した一人に、前頭葉脳損傷という最重度障害の娘を持つ塩沢みどりさんがいる。二人の出会い、そして命、歌について、塩沢さんの主宰する瞑想センター・スペース水輪で語り合ってもらった。

命と愛と希望と夢を込めて歌う

●対談 スーザン・オズボーン VS 塩沢みどり

歌手

スーザン・
オズボーン

Susan Osborn アメリカ・ミネソタ州生まれ。幼いころから聖歌隊に参加。アイオワ州立大学在学中に歌手としての道を歩み始める。78年から8年間、ポール・ウィンターのバンドに参加。92年、「ふるさと」「花」など日本の歌を吹き込んだCD「和風」が日本レコード大賞企画賞を受賞。全世界に多くのファンを持つ。



パラリンピック 閉会式で歌う

塩沢 スーザンと初めてお会いしたのは四年前でした。映画「地球交響曲」の助監督をされた、フロームゆかりさんが、ここスペース水輪にあなたを連れてきてくださいました。それがご縁になって、今度、長野オリンピックのメダル授与式とパラリンピックの閉会式で歌ってもらうことになりました。

この夢が実現するまで、本当に多くの方が応援してくださいました。長野の経済界の方々、日本のファンクラブ

のメンバーはじめ多くのファンの皆さん、「地球交響曲」の龍村仁監督、フロームゆかりさん、演出家の宮本重門さん、日本ホリスティック医学協会の帯津良一会長はじめたくさんの方たち……。それから音楽評論家の湯川れい子さんには、昼夜を問わず迅速かつ誠実に動いていただきました。お力添えいただいた皆さま方には、心から感謝しています。

オズボーン 私がパラリンピックで歌いたいといったのは、去年の十一月に、この水輪でボイスセミナーをした

ときのことでした。早速みどりさんたちが動いてくださって、歌えることになりましたが、開催の三か月前でしたから、実際はパラリンピックのスケジュールは、全部決まっていたんじゃないかしら。

塩沢 すでに分刻みのスケジュールが決まっていたと思いますよ。

オズボーン 普通ならそこへ割り込むことは不可能でしょうね。しかし、二つの大きな心が出会うと、こういうことも起こり得るのですね。とくに私がパラリンピックで歌うことについて

は、二人とも素晴らしい機会だという理解がありましたし、みどりさんが私を信頼してくださったから、多くの人の支援を得られたのだと思います。

塩沢 初めてあなたがここに来られたときは、たまたま長野に来る機会があったので、ちょっと挨拶に寄られただけだと思っていましたが、あなたは私の娘の早穂理の部屋に入って、「アヴェ・マリア」をはじめ、二時間近くも歌ってくれました。

ご承知のように、早穂理は二十三年前、前頭葉脳損傷、最重度の障害者と



スペース水輪代表理事

塩沢 みどり

しおさわ・みどり 前頭葉脳損傷という重い障害を持つ娘・早穂理さんとの生活の中で、自分の心を深く見つめ、さまざまな気づきを得る。坐禅・瞑想・霊修行などを経て臨死を体験、個を超えた広大な世界を知る。平成5年、夫君・研一氏と長野県飯綱高原に、生活のすべてを瞑想とするためのスペース「水輪」を開設。新時代の哲学、医学、衣食住、芸術などの中枢たらんと目指す。

いう宿命を背負って生まれてきた子どもです。自分で食べることも、歩くことも、話すこともできません。それだけではなくて、発作を起こしたりいらいを示したりしますが、スーザンが歌っている間はもちろん、歌と歌の合間も、彼女はとても静かにしていました。私は母親ですし、二十三年もそばにいますから、話がでなくても、娘のいいたいこと、魂の響きとでもいうものがよくわかります。ですから、スーザンが来てくれたときは、娘の心が不思議な気持ちに満たされているということがわかりました。それがわかった私は、過去からいま、そして未来へと、永遠につながっている時間の中にいるような気がしました。まるで時が止まったみたいで、エアポケットにいるような気がしました。

オズボーン よくわかります。

塩沢 いろんな方に私の娘を見ていただく機会がありますが、ほとんどの方は、娘のことを身体障害者、大変な人、あるいは可哀想な人、という目で見ます。しかしスーザンが来たそのときの空間というのは、砂金を撒いたような光に包まれ、ハンデいの有る無しを超えた、ものすごく深いレベルで二人の魂が響き合っていると感じました。

人の心を癒す 歌でなければいけない

塩沢 そのときまで、私はスーザンのことを、一人の歌手であるという以外にあまり知りませんでした。しかし、そのときの娘の目を見、娘の心を感じながら、あなたはまるで女神のような人だと思い、改めてあなたの歌の力とこの人はすごいんだなと思いました。

同時に、ただ癒されるだけではなく、満ち満ちている愛みたいなのを感じました。部屋の外で鳴いている鳥の声も、お庭に咲いているお花も石も木もありとあらゆるものが響き合っているのを感じました。このスペース水輪では、ミニ・コンサートを開いたりしますから、娘にも聴かせるのですが、あのときほど満ち足りた娘の様子を、私は感じたことがありません。

オズボーン はい。

塩沢 そこで私は長野冬季パラリンピック組織委員会(NAPOC)の人にも、いま申し上げたような話をしたのです。パラリンピックが心を響かせるものである以上、そこで歌われる歌は、いま人気があるからとか、売れて



オズボーン「パラリンピックでは不可能なことはいないという思いを込めて歌います」

いる、というレベルの歌であってはいけない。本当の意味で人の心を癒す歌でなければいけない。でなければ、日本から世界に向けて発信する意味がないんだ、ということをしりました。

オズボーン 私はいままで、何度となく「あなたにとつて歌とは何ですか」と質問を受けてきました。おそらく私に投げ掛けられる中で、いちばん多い質問だったと思います。正直いって、その答えはまだわかったとはいえませんが、少しはわかったように思います。

私は歌うとき、呼吸をゆっくりとさせて、意図的に心身の活動を鈍くさせます。すると、ここに私が在るというだけの状態になって、時間が止まってしまします。そこには昨日も明日もなく、いまという瞬間しか存在しません。私の注意はそれぞれの音に集中できます。私たちは毎日忙しい生活をしていますが、ゆっくりと呼吸をし、動きを緩めることで、命に触れることができず。すると、時間とか、まわりの状況は関係がなくなってしまうのです。

そこで、先程のみどりさんの言葉によって気づき始めたのですが、パラリンピックで私が歌うことは、選手たち

の夢を拒むものは何もない、ということとを歌うことです。早穂理ちゃんと同じように、不可能なことは何もないということですよ。

塩沢 私もそう思います。

人生を深く

見詰めるなさい

オズボーン 現在、私たちは見掛けの上では不可能であるような状況に直面していますね。例えば、地球上にはたくさん国家、文化、宗教などの違いがあります。これらの違いを持った人々が、お互いにどううまくやっていくのか。地球とどのように調和を保ちながら生きていくのか。その違いをお互いが敬い合うことができるのか。

多くの人はそれは不可能なことだと言っています。しかし、人々の中には私も含めて、それが決して不可能なことではないということを知っている人がいるのです。そういう人たちが表面に出てきて、思っていることを発言したり、生きる姿を見せたり、また歌ったりして、決して不可能なことではないということを語る必要があります。そうすれば、みんなが再び希望を持つことができると思うのです。

塩沢 いまのスーザンの言葉は、人生全般に対する言葉でもあると思います。

す。というのは、私たちは自分の人生は家族にしろ仕事にしろ、穴蔵のような小さな世界だ、と思いがちなんですけれども、そうじゃないということではありませんか。

オズボーン そのとおりです。私たちは食事を作ったり、洋服を買いに行ったりすることが人生だというように思っていますが、人生というのはもっともっと大きなものだということを知らなければならないし、知るための窓も必要ですね。

塩沢 あなたがそういう大きな考え方に至るまでには、さまざまな転機があったのでしょうか。

オズボーン それを語ることは、私の人生を語ることになってしまいます。

最初は私の両親から影響を受けました。彼らはいつも人生の深いところを見ていました。学校の先生、音楽の先生、教会の先生からも影響を受けました。もちろんそれだけではなく、街で擦れ違う人も私にとっては先生でした。

彼らから教えられたことは、一様に「物事は表面に見えることばかりではないのだから、深く見詰めるなさい」ということでした。私はそういうことを心掛けながら、ずっと歌ってききました。歌を歌うことが、すなわち瞑想（めいそう）をしていたことになるんですね。

塩沢 とくに影響を受けた人はいますか。

オズボーン みどりさんもそうです。私は毎日いろんな人に会いますが、

ら、みんなから日々影響を受けています。しかし、強いていえば、第二次世界大戦のときのアメリカ大統領だったルーズベルト夫人のエリノアです。彼女は決して見栄えのいい人ではありませんでしたが、とても心の美しい人でした。彼女は子どもたちのため、自分で自分を助けることのできない人のために、人生を捧げました。私は子どものころ、彼女のようになりたいと思っていました。

歌と歌の合間にも音が響いている

オズボーン それから私の父です。

彼は医師で、人々を癒すために人生を捧げました。母もそうです。彼女は彼女自身がどんなに悲しくても、失望していても、いつも私のそばにいて、私がいふことを聞いてくれました。

もう一人挙げるとすれば、マリア・カラスです。ご承知のように、有名なオペラ歌手ですが、彼女は単なる歌手ではなく、音楽に命を吹き込んだ人でした。私も彼女のようになれたら、と思います。

私が古い歌を歌うとき、その歌には作った人の人生が込められていると思うのですが、それを私のような新しい歌い手が歌うということは、そこに私

塩沢 「人の心を癒す歌でなければ、世界に発信する意味がありません」



の人生が会って、新しい生命が生まれることだと思えます。命を込めて歌い、もともと新しい生命を生み出したいですね。

塩沢 水輪ではいろんな人たちにミニ・コンサートをしてもらっていて、娘にも聴かせますが、その時々で、じつと聴いていたり、部屋から逃げ出そうとしたり、娘の反応が違っています。

最初は特別な理由があるとは思いませんでした。ただ、だんだんわかってきたことがあります。それは、演奏にエゴが感じられる人、真心が込もっていない人だと早穂理は逃げ出すんです（笑）。だって、彼女にはお付き合いだから我慢していなさやとか、途中で退席したら失礼だという考えはまったくありませんから。

オズボーン はあ、相手の本心かわかってしまうのね。

実は、そのあとアメリカに帰ったとき、私はジルのことを思い出しました。私の幼友達で、早穂理ちゃんとよく似た女の子でした。当時、私は八歳でしたが、よく彼女のベッドの横で歌ったのです。彼女のことを思い出させてくれた、早穂理ちゃんと会ってよかったと思います。

塩沢 歌と歌の合間には音がないん

ですが、その間も音が響いているような感じてした。スーザンは本当にすごい人だと思ったんですが、初めてお会いしたあと、ここでボイスセミナーもやっていただきました。このセミナーを始めるきっかけはどんなことだったのですか。

オズボーン 二十年ほど前のことですが、喉を痛めて、声が出なくなってしまうことが何回もありました。もうプロの歌手にはなれないと思いましたから、別の仕事を探さなくては思っていたところに、あるセンタールから歌を教えてほしい、という依頼を受けました。教えるなんてとても無理だと思いましたから、断ったのですが、「みんながあなたのように歌いたいと願っているのだから、どうしても」と懇請されて、引き受けることにしました。

生徒は五人ぐらいだろうと思っていましたから、どんなことをどんなふうに教えたらいいか、私なりにいろいろ考えました。ところが、教室へ行ってみたら、七十五人も生徒がいたので、私はびっくりして、頭の中が真っ白になってしまいました。

愛と希望と夢を 与えてくれる歌声

オズボーン そのとき、歌を教える

というのは私の頭の中にあるものではない、ということに気が付きました。基本は、歌を歌う瞬間の自分を信頼することです。これはだれにでもできることです。そして、それができるということを知っているだけだが、その人のそばにいてあげるといことです。だから、私は彼らの証人になってあげよう、彼らを信じてあげようと思いました。

そこでは私も自分の人生を語り、彼らも彼らの人生を語る。安心してそういうことができるスペースも必要です。そのように考えたのが、ボイスセミナーを始めたきっかけです。

塩沢 スーザンのボイスセミナーでは、心が閉じてしまつて声の出なくなつた人の声が出るようになったのを、目の当たりに見ましたし、自閉症の子どもやアトピーの子ども、がんの人も癒されると聞いています。

今回、パラリンピックにスーザンを推薦しようといつてきてくださった多くの人々の中には、プロの歌手もいらつしやるんですが、その方は、毎日毎日売れる歌を要求されるままに歌い続けてきたそうです。歌うことが大好きで始めた仕事だけれども、そうしていううちに、自分の歌を忘れてしまつた

というんです。歌うことが怖くなつてしまつたというんですね。

オズボーン 心が閉じてしまつたのね。

塩沢 そうなんです。しかし、彼女もスーザンのおかげで心が開いたというんです。

こんなことを推薦文に書いてくれた女性もいます。

「私はいままで何を恐れてきたのか、いつもいつも、毎日毎日が不安でした。でも、スーザンの歌声に触れたとき、私はいままで一体何を恐れていたのだろうと思ひました」

こう思つたとき、彼女の心は開かれたのです。このように、スーザン

人を癒すだけではなくて、愛と希望と夢を与えてくれるのですが、そういう力はどこから出てくるかと思つていらつしやるのかしら？

オズボーン どこから出てくるんでしょう。ミステリーですね。

みどりさんの目の輝き、光はどこからくるのでしょうか。それは人生を生きていることからくるのだと思います。過酷なことを見ることも人生を生きていることです。素晴らしいことを見ることもそうです。みどりさん、あなたにとつては、毎日お嬢さんのおむつを換え

ることでもあります。そのときに、お嬢さんの生命力を感じることもそうでしょう。結婚されていることもそうなのでしょう。いいときもあれば、嫌なときもあります。

アメリカ人の心にも触れる

塩沢 私は娘の介護をしていて、絶望的になったことがあります。そのときに私を救ってくれたのは、座禅をすることでした。スーザンのお話は禅に通じるところがあるし、深い瞑想をされた境地にも似ています。

何かトレーニングをしていらつしやうたのですか。

オズボーン 私にとっては人生自体がトレーニングの場だと思っていますが、毎朝している瞑想が自分の心をよく理解する助けにもなっています。しかし、何よりもデヴィッドと結婚したこと、そして過ごす毎日が私にとっての学びの場だと思っています。

塩沢 じゃあ、そのご主人をここへ呼びましょう。

オズボーンさんの夫君で、彫刻家であり、絵画芸術家でもあるデヴィッド

さんが登場。

オズボーン ハーイ、デヴィッド。

何をしていたの？

デヴィッド 背掻きをしたり、外を歩いたりしていたんだよ。

塩沢 スーザンの歌う「さくら」にしても、「ふるさと」にしても、そのほかの日本の歌にしても、彼女は私たちが日本人の心を非常によく理解していると思うんですが、デヴィッドはどこにその秘密があると思いますか。

デヴィッド うーん。スーザンは自分の心をよく知っている人だと思えます。そして、その時その場で感じるフイーリングを歌にするんです。日本人たちはとても繊細な心を持っていますから、それがよく理解できるのだと思います。

塩沢 スーザンの歌が日本ではすごく愛されていることを知ってる？

デヴィッド いいや(笑)。でも、彼女が「さくら」や「赤とんぼ」をアメリカで歌えば、日本と同じようにアメリカ人の心にも触れるんですよ。

オズボーン 日本の人は私が歌う日本の歌を、小さいときから聴いていましたね。ところが、アメリカ人の私が歌うということは、自分たちの知らない人たちが違う意味を加え、違う方法で歌うことですから、聴き慣れていた歌に生命が蘇るということではないのでしょうか。

デヴィッド 二日前の夜、スーザンがここでミニ・コンサートを開きましたね。そのとき聴いていた、二十代半ばと思われる日本の青年が、「きょう、聴いた歌はずっと聴いてきた歌ばかりだけれども、何か新しい物語が語られたような気がしました」といっていましたよ。

塩沢 本当にスーザンの歌は不思議な力を持っているんですね。

ところで、ボイスセミナーではどんなことをするのか、あなたからその様子を説明してくれませんか。

オズボーン 私のセミナーはとても簡単です。まず皆さんに円形に座ってもらいます。そして私が自分の人生についてお話をします。それから簡単な呼吸法を教えます。つまり、鼻から息を吸って、口からゆっくりと吐くのです。息を吐くと、体がリラックスします。次に息を吐くときには、「ハアーツ」と音を出します。それが歌の始まりです。その音を徐々に大きくしていきます。

魂の声を聴くことができる

オズボーン 普通の人は、これから歌を歌うときには緊張してしまふものではない。だから、息を詰めた

ような声になってしまうのです。しかし、「ハアーツ」とリラックスすると、声の質が変わってしまします。自分の声はこんな声だったのかと気が付きまします。それは感動することでもあります。ボイスセミナーは三日間ありますが、一緒に歌を歌ったり、お互いの歌に耳を傾けたりします。サウンドだけで、ほとんど歌詞のない歌を歌います。もちろん最初から最後まで歌おうとしな人もいます。しかし、私は無理に歌わせるようなことはしません。沈黙もまた、歌うことと同じように大切だと思ふからです。

フムフムとメロディーを歌うだけですから、とても単純だと思われるかもしれませんが、三日という時間をかけてやっていくと、とても美しい、魂の声を聴くことができるのです。

塩沢 私たちは、歌を歌うのは声のいい人でなければならぬ、というような固定観念に縛られていると思います。そういう傾向はとくに大人の男性に多いと思いますが、私は皆さんにぜひ歌ってほしいと思うんです。

オズボーン まさにそう思います。

みんなが一緒に歌い、踊り、自分たちの物語として語るということを、原始の人たちはセミナーという形ではなく、

日常の習慣としてやっていたと思います。

す。ですから、私のセミナーに来る人たちにさまざまな物語があります。

ところが、多くの人は子ども時代に、自分は歌えないんだと教え込まれてしまっているのです。歌を歌うには声がいけないでなくてはならないという観念を植え付けられているんです。

子どもが「アー」と歌うときは、たいていそう純真に歌います。それは歌が上手とか下手だということではありません。しかし、そのとき、たまたま不機嫌な人がいて、「歌うんじゃない」という言葉が発せられたかもしれないし、だれかが上手下手を判断してしまったかもしれない。すると、子どもの心は閉じてしまうのです。

歌に關しては多くの人が心に深い傷を持っていますが、もう一度歌うためには、まずはそういうことが起こったのだということを認識する必要があります。感じるのです。そして、みんなが理解し合うことです。例えば、私が理解するそうすれば、過去の観念から解放されて、また歌うことができます。

塩沢 私にはうまく伝えられませんが、ボイスセミナーに出ると、あなたが本当に伝えたいと思っている、深いところが何かということがよくわかり

ます。

オズボーン そうですか。でも、つきから私は四苦八苦しているのですが、歌を言葉で説明するのは本当に難しいですね。この記事が出るときに、私のCDを付録に付けてもらえるといんですが……（笑）。

理想の愛ではなく、 真実の愛

塩沢 スーザンの歌を直接聴いてもらうのがいいんじゃないんですけれどもね。私はあなたが初めてここに来られたときのことを、いまでも鮮明に思い出すことができますが、口から音が出ているときはもちろん、音が出ていないときでも何かを発信しているんですね。本当に素晴らしい人にお会いできたことを感謝しています。

オズボーン いえ、みどりさん。あなたこそ素晴らしいです。あなたもご主人の研一さんも、私には信じられないくらい立派な人です。真の奉仕とは何かを、私たちに見せてくださっています。奉仕はいいことだ、だからやらなければならない、という動機で奉仕をしているわけではありません。

瞑想センターは数多くありますが、多くのそれは雲の上のような存在であり、理想を語るだけで、私には地に足

がついていないように思えます。しかし、あなた方は実践的な生活をしておられます。これが本当の精神性、靈性だと思えます。自分のことが何もできない人の面倒を、毎日、しかも二十数年にわたって看るといことは、理想の愛ではなく、真実の愛なのです。ですから、あなた方が精神性について語るとき、私は心からその話に耳を傾けることができます。それはただの理想ではなく、真実が語られているからです。

精神性についてはいろんな方法があり、いろんな人が語っていますが、毎日、自分で食事のできない人に食事をさせ、おむつを換えてあげなくても済んでいる人が、精神性について語るのには楽なことだと思えますし、あまり実践的なことではないと思えます。現代は個人も企業も、実践的なことが必要な時代なのです。大変な仕事を、でも喜びを持ってやらなければなりません。そういう意味で、あなた方は私にとって本物の精神性の模範となってくたさる人です。ですから、私はあなた方と一緒にいられることがとても幸せです。

あなたとは知り合って四年ですから、まだ新しい友達ですが、とっても古く

から知っているような気がする友達です。

塩沢 どうもありがとう。

オズボーン 人生にはすごく悲しいことがあります。私にとっては、父と別れなければならなかったときが最大の悲しみでした。

先程申し上げたように、父は医師でしたが、素晴らしい歌を歌う人でもありました。ほかの人を、心から思いやった人でした。しかし、父はうつ病にかかって、人生のほとんど半分を、薬なしでは過ごせなくなってしまったのです。母は一九八九年に亡くなりましたが、独りになった父は私たちの住む地域にやってきました。

悲しみが 人間の根を深くする

オズボーン 私たちのところへ来て二年ほどしたとき、父はもう薬は飲まないことにすると決めましたが、それは父のうつ病をどんどん進行させることでもありました。そして、ついに父を見送る日を迎えたのですが、私は父が下した決断を敬うことを知りました。なぜならば、父の人生は私のものではなく、父自身のものであるからです。私は父が死ぬときまで一緒にいました。そのときに、父がどんな状態であらう

とも、父を愛するということを学んだのです。

父を見送るということは、これまでの私の人生で、最も悲しいことでした。一緒に過ごした間に私が知ったこと、学んだことは、私に対する大きなプレゼントであることがわかりました。

塩沢 私は娘を育てる過程で人はいえない悲しい思いを持ちましたが、その悲しみが自分という人間を深くしてくれたと思っています。その体験から人生には悲しみも必要だと思います。

オズボーン それは絶対に必要なことだと思います。悲しみを知らなければ、本当の喜びを知ることができないと思いますから……。

塩沢 ところで、パラリンピックの閉会式では「上を向いて歩こう」を歌うことになっているそうですが、日本語、英語、どちらで歌うんですか。

オズボーン 前半の半分を英語、後半を日本語で歌います。

塩沢 これはスーザンが選曲したんですか。

オズボーン N A P O C から「スキヤキ・ソング」を歌ってほしいと指定してきたのです。だから、オウ、困った。私は歌いたくないって、みどりさんにすぐにファックスしたじゃありませんか。

せんか。

塩沢 ああ、そうだったわね。

オズボーン 日本の人は英語版の歌詞が、オリジナルとは似ても似つかないほどひどい、ということをご存じないようですが、こんな歌は歌いたくないと思ったのです。

湯川れい子さんにそのことを告げたら、永六輔さんが作詞した、本来の日本語の歌詞の意味を教えてくださいました。それを聞いて、こんな素晴らしい詞があるのに、「スキヤキ・ソング」などという題を付け、変な歌詞が付いているなんて残念だと思ったのです。

そこで、デヴィッドにできるだけ日本語の歌詞のニュアンスを表せるような詞を書いてもらったのです。彼は一語一語注意深く選んでくれました。この英語の歌詞も大変に素晴らしいですから、日本の皆さんにぜひ聴いていただきたいと思います。

塩沢 きつと素晴らしい閉会式になりますね。

オズボーン 三月十四日のパラリンピックの閉会式はテレビ中継もあって、全世界に映像が流されます。私が出演するのは午後六時五十五分からの二分三十秒きっかりと決まっていますので、ぜひ見てください。